

三、家庭における非行児の指導

非行児の概念・定義は難しいが、ここでは一応、心理的な原因により「盗み、たかり、けんかななどの反社会的行動をある程度常習的に行う子ども」と定義する。

昔から、非行児の指導に関して、次のようなやり方がいわれている。「鉄は熱いうちに打て」のたとえと同じように、非行の初期には厳しい態度で臨めというものである。これは、初期の非行が発覚しなかつたり寛大に取り扱われたりすると、味をしめ、罪意識が芽生えなかつたりして、常習性非行者になつてしまふという考えに基づいている。確かに、こうした例も少なくなく、一理はある。しかし、「初めのころの非行」とは、累非行者になつて初めて言えることで、大体一つや二つの間違いを起こすくらい普通の子どもでも珍しいことではないし、それくらいで、「非行児」とか「非行少年」のレッテルを張るのはいきすぎである。

非行を犯した子どもの大部分は、それが発覚せず、また発覚して寛大に取り扱われても、特に味をしめることもなく、その後いわゆる「非行少年」に発展していない。もし、これら

の子どもがいちいち非行が発覚し、「鉄は熱いうちに打て」とばかりに厳しく叱られ、生活を監視されたらどうであるうか。信じてくれないおとなを信じられず、反感をもち、気持は歪み、非行への意識が芽生えて、それこそ非行少年への道を歩いてしまう者も出て来よう。要するに、鉄は熱いうちに打つと曲がりすぎてしまうもので、このやり方は何もしないで放置する自然治癒法よりもより高い効果を挙げることを期待できず、熱いうちに打ちすぎたり、うちそこねたりした者への治療法を用意していかないのである。これは非行児の指導法というよりも、たまたま間違いを起こした子どもに対する、ある一つのやり方にすぎない。

有名なヒリー・グリユック夫妻らの説を引くまでもなく、非行児を生みだす最大の要因は、家庭内の病理、特に親子関係の障害であることは明らかであり、さらにそれをせめめれば親の養育態度である。それ故、家庭での非行児の指導は、まず親の養育態度を改善することから始まる。しかし、ここで問題にする親の養育態度は、一般に問題行動を生むとされている厳格・拒否・残酷・放任・過保護・過剰期待などの抽象的なパターンではなく、非行に直接関係する非行児特有のパーソナリティを形成するような具体的な親の養育態度である。本稿では、非行児と対照的な非社会的問題行動を示す神経症的児童と比較しながら、非行児たらしめる基本的なパーソナリティ特性を明らかにし、さらにその形成プロセスを見ることによって、いかに養育態度を改善し、指導を行ったらよいかを考察したい。

非行児はよくうそをつき、友達の持ち物を盗んだり、金品をたかたりして、それが親や

教師や友人に発覚しても、まるで平気なことが多い。これは彼らに、罪意識や恥意識が欠如しているからである。これに対し、一般に神経症的児童は、罪・恥意識が強すぎて、何気ないうそがつけず、だれも見えないのに道端に落ちているお金を拾うのにも躊躇してしまう程である。神経症的児童は、悪いことをしたら何か報いがあるのではないだろうか、だれか見ているのではないだろうかなどと常によそからの目を気にして行動が憶病になる。こうした違いが、深刻な欲求不満に遭遇して、一方は反社会的行動へ、他方は非社会的行動へと分かれさせるのである。それでは、罪意識を育てるにはどうしたらよいのだろうか。鉄は熱いうちに打てとばかりに、悪いことをした時に叱責することで生じるのだろうか。否、一般には、叱責や罰は、それを与える者と与えられる者との情緒的な交流を阻害し、むしろそれを妨げる。罰を与えられる子どもは、罰を与える親や教師を心理的に拒否し、親や教師の感情や態度、そして考え方に反発し、かえってそれと反対の傾向を受け入れる素地を作り上げてしまう。

夏の夕暮、ある子どもがいかにも腹をすかした様子でしょんぼりと「氷」の看板を掲げた食堂の前に立っていた。父親は情婦をつくって妻子に冷淡、母親は地域の福祉活動とPTA副会長の仕事に専念、彼は学業成績を挙げることを叱咤激励する母親に反感を持っていた。彼は当日、成績のことで母親に叱られ、思わず家を飛び出してあてもなく時を過ごしていたのであるが、そこである急学グループの一員に声をかけられ、地獄に仏の心境で、初めて心

の通った経験をして、そのままずると仲間に入り、万引きを行うようになった。彼はその後、理屈では悪いことは分かっていたが、何回警察につかまっても仲間とのつきあいをやめず、時々一緒に盗みをやり、警察では仲間をかばって、グループの不利になることは一切口をつぐんだ。つまり、彼にとつて心の通い合った仲間を裏切ったりグループの規制を破ることは、罪となり恥となったのである。

罪意識や恥意識は、まだ発達途中の未発達な子どもにとつては知的に理解される善悪の区別とはかなり無関係であり、このように深い情緒的なつながりのあるものと一体化することによって、それを基準として生じる。従つて、非行児に罪・恥意識が乏しいということは、彼らが情緒的に一体化出来る正常規範を持つ対象を持っていないということである。これは極めて重大なことである。即ち、多くの非行児は、正常なモラルを発達させている親や同胞を情緒的に拒否している。このことを認識することによって、非行児にとつて初めて、こうした親子関係の病理を生みだした親の態度が問題になる。

拒否型であれ、放任型であれ、過剰型であれ、とにかく子どもが親を拒否する結果を生む一連の親の態度こそ問題なのである。子どもが抱いて欲しい、遊んで欲しいと望んでいる時に応じてやったであろうか。友達にいじめられ、学校で恥をかいて失意の中で帰ってきた時に、優しく受け止めてやったであろうか。あるいはまた、子どもと一緒にいる時間を本当に心楽しく交わって来たであろうか……。このように反省していくと、向後何をすべきかは、

おのずと明らかである。

子どもは本来、情緒的な存在である。親に拒否されていない、それどころか愛されている、信頼されていると確信する時、親と情緒的に結びつき、融合し、敬愛する親の思考や態度や感情を積極的に取り入れていく。このようにして子どもは次第に、情緒的に交流し、対人関係を結んでいく基本的傾性を発達させていくが、われわれは、これを「共感性」と呼んでいる。子どもは、この共感性によって、人と情緒的に結びつき、同一化し、モラルを発達させていくが、それは、子どもが、家族と共に喜び共に悲しむ体験を積み重ねて培っていくものである。

欲求不満に際して、非行児を反社会的行動に走らせるもう一つの基本的な特性は、自制力の欠如である。多くの非行児は、あれが欲しい、あいつが憎らしいと思うと、機会があれば前後の見境なく盗みや乱暴をしてしまう。自制力というのは、やってはいけないと思うことを抑えて、じっと我慢の子でいることであるが、この点に關しても神経症的児童と非行児とは全く相反した傾向を持つている。即ち、神経症的児童は、今こんなことをやっってしまったらあとで罰を加えられはしないか、困ることになりはしないか、と先行きに強い不安を持つて、やってよいこと、やらねばならぬことまでできなくなってしまう程に自制的であるのに対し、非行児は、先行きの不安はあっても、とにかく自己に脅威を与えている現在の欲求不満に耐えきれずに、欲求充足的な短絡反応を起こしてしまう。言い換えれば、神経症的児童

が情緒的に現在よりもむしろ将来の世界に住んでいるのに対し、非行児は現在に情緒的な生活を送っている。それ故、神経症的児童が自制的で迂回的な行動をとるのに対し、非行児は欲求充足的で短絡的である。当然のことながら、欲求不満において、両者は非社会的行動と反社会的行動に分かれてくる。

非行児が情緒的に現在の世界に住むようになる原因は、およそ、次のように分けることができる。

逃れられない厳しい罰体験（耐えきれない欲求不満）

子どものうそや失敗その他非難されるような行動を取りあげて体罰そのほか厳しい態度で追及すると、子どもは罰の恐ろしきを知って行動を改めようとするよりもむしろ、そういう過酷な場面をとにかく逃れたいということで、一層うそをついたり、欲求不満やそれが予想される状況では直接的、欲求充足的行動に走るようになる。ある非行少年の父親は、少年が幼少の時から、何か悪い行動をすると体罰を加え、謝るまで徹底的に追及していたが、それがますます少年をその場限りの自己防衛的な言い訳行動をとらせるようになっていったことに気づかず、「これほどしつけをしても直らないから生まれつきのうそつきでドロボウだ。」と嘆いた。その少年はすでに6歳時に、抜き足差し足で忍び寄り、昼寝をしている父親のポケットから財布を抜き取っている。将来受ける罰の予測よりも現在の欲求に全く勝てなかつたのである。

明日への期待がもてないこと(慢性的欲求不満)

例えば、約束のほうびや土産が度々裏切られ、待つても待つてもよいことがないという経験を積み重ねて慢性的な欲求不満に陥ると、将来への希望をなくし、場当たり的な刹那主義がもたらされる。これは物質的な問題ではなく、親や同胞との楽しい毎日の生活が期待できないという精神的な状況ができあがることによる。

即応 即罰的体験

子どもがある欲求を持つと、それをすぐ充足してやったり、子どもが何か好ましくない行為をした時に即座に罰を与えるなど、子どもの欲求や行動に直接に即応すると、現在のことにだけに反応する傾向が身につき、欲求を将来に引き延ばしたり、罰を将来に予測したりして行動をコントロールすることを学習しない。

このように見てくると、子どもの短絡的なメカニズムを改善して自制心を養う指導の仕方は、おのずと方向づけられる。要は、子どもの欲求や行動をその場限りに終わらせないで、将来に期待や不安を持つように導いて、その目を今日から明日へと将来に向けさせ、そして実際にその期待や不安に解答を与えてやるようにすることである。正に「明日へ向かうしつけ」でも言ったらよいだろうか。こういう体験をすることによって、子どもは、情緒的に現在から将来へと見通しをもち、自由に移動することができるようになって、自己をコントロールするようになる。

なお、すでに明らかであるが、共感性が豊かに発達することによって、自他の文脈の中で自己の欲求や行動をとらえ直すために、当然自制力も備わってくる。ただ、こうして発達する自制力は、かなり発達した段階、即ち、青年期以後の問題であろうと思われる。

非行はもちろん、親の養育態度と非行児のパーソナリティだけから生ずるものではない。その他、同胞との関係、学校での適応、そして社会的、文化的、経済的要因など様々に関係してくる。しかし、パーソナリティが変容することによって外的な要因に負けない強さが生まれてくる。このパーソナリティの変容をもたらすもの、それはすでに明らかのように親の養育態度の底に流れる愛情以外にはない。臨床的に経験するところであるが、逆説的に言って、非行児は極めて純真である。人の好意や愛情を確かめても確かめても確かめきれない神経症児と異なり、実によくそれを感じ取る。これは、非行児がいかに愛に飢えた生活をしているかを物語っている。彼らは、親を拒否し、背中を向けながら、親がいつ今までと異なる手を差し伸べるかを待ちわびている。親の愛を知って振り返り、彼らがそれを確かめた時、非行児の指導は、恐らく、初めにして終りになるだろう。

(『児童心理』28・7 特集「家庭教育を考える」(一九七四年)